

病虫害発生予報 第3号(6月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2301

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病(紀北地域) ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ ニカメイチュウ イネミスズウムシ	並 並 並 やや多 並 並 並 少 少	カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ アブラムシ類	並 並 並 並 並
			カキ	うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 かきクダアザミウマ フジコナカイガラムシ	やや少 並 並 並 やや多
ウリ類	モザイク病 べと病 うどんこ病 疫病 つる枯病	並 並 並 並 並	モモ	せん孔細菌病	多
			野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミカンキイロアザミウマ	やや多 やや多 やや少

気象予報

1か月予報 (予報期間 5月25日から6月24日 大阪管区气象台)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

6月	月平均気温(平年値) (°C)		月降水量(平年値) (mm)	
	和歌山	23.0	和歌山	189
潮岬	22.0	潮岬	352	

I. 水 稲

1. いもち病(苗いもち、葉いもち)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続く条件で発生しやすい。

② 紀南早植え地域の常発地では気象条件に注意し、発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。

③ 紀中、紀北の普通期栽培地域では、キヌヒカリ、コシヒカリなどの罹病性品種を作付けする場合には育苗箱処理剤を施用する。

④ 田植え後の余り苗を水田に放置しない。

2. 紋枯病 紀南地域

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 気温が高まると病勢が進展するので常発地では発生に注意する。

3. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 ヒメトビウンカ 発生量 並

縞葉枯病(紀北地域) 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 予察灯による誘殺数は5月4半旬現在、いずれの地域も0頭(平年:紀の川市0.1頭、上富田町0.1頭、那智勝浦町0.1頭)である。

② 和歌山市およびかつらぎ町におけるヒメトビウンカ(越冬世代)のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、いずれも10%以上と前年(それぞれ16.1%、15.9%)に引き続き高かった。これらの保毒虫率は、平成3~12年の平均2.8~3.4%より高い。

③ 紀北地域の本田における前年のイネ縞葉枯病の発生面積は834ha(平年704ha)とやや多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱処理剤を施用する。

③ 第1世代成虫は6月下旬に水田に飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。

④ 平成25年度病害虫防除技術情報第1号を参照する。

4. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 ツマグロヨコバイ 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による誘殺数は5月4半旬現在、いずれの地域も0頭(平年:紀の川市0頭、上富田町0.1頭、那智勝浦町0.1頭)である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 前年にツマグロヨコバイの発生が多かった地域では、田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

5. セジロウナカ

(1) 予報内容 発生時期 やや遅 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による誘殺数は5月4半旬現在、いずれの地域も0頭（平年紀の川市0.2頭、上富田町1.2頭、那智勝浦町0.8頭、初飛来の平年：5月4半旬）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

6. トビイロウナカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による誘殺数は5月4半旬現在、いずれの地域も0頭（いずれの地域も平年0.0頭、初飛来の平年：7月2半旬）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

7. ニカメイチュウ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

① 予察灯による誘殺数は5月4半旬現在、いずれの地域も0頭（平年紀の川市0.0頭、上富田町0.0頭、那智勝浦町0.0頭）である。

② フェロモントラップ（紀の川市）による5月1～4半旬の誘殺数は、0頭（平年0.2頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 前年に発生が認められたほ場では、田植え時に有効な成分を含む育苗箱処理剤を施用する。

8. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市で0頭（平年0.2頭）、上富田町で3頭（平年11.2頭）、那智勝浦町で2頭（平年17.8頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 有効な成分を含む育苗箱施薬を行っていないほ場で、田植え3～7日後に成虫による食害株率が30%あるいは50株あたり成虫数が12頭を越える場合（5%被害許容）は、直ちに薬剤防除を実施する。

II. 野 菜

<ウリ類>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の施設栽培キュウリおよび露地栽培スイカにおける5月5半旬現在の発生ほ場率はそれぞれ13.3%、0%（いずれも平年0%）であった。

② 紀中地域の施設栽培キュウリおよびトンネル栽培スイカにおける5月5半旬の発生ほ場率はいずれも0%（過去5年の平均0%）であった。

③ アブラムシ類の発生は平年に比べやや多と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の施設栽培キュウリにおける5月5半旬現在の発生ほ場率は13.3%（平成53%）であった。
- ② 紀中地域の施設栽培キュウリにおける5月5半旬現在の発生ほ場率は50%（過去5年の平均63%）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
- ② 薬剤防除は予防散布を重点に、葉裏に十分かかるように行う。

3. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の施設栽培キュウリにおける5月5半旬現在の発生ほ場率は0%（平成37%）であった。
- ② 紀中地域の施設栽培キュウリにおける5月5半旬現在の発生ほ場率は92%（過去5年の平均73%）であった。
- ③ 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける発生ほ場率は5月5半旬現在、0%（過去5年の平均0%）であった。
- ④ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培やトンネル栽培では通風をよくし、薬剤防除は薬液が葉裏にも付着するようていねいに散布する。

4. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培スイカにおける5月5半旬現在の発生ほ場率は0%（過去6年の平均0%）であった。
- ② 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける5月5半旬現在の発生ほ場率は0%（過去5年の平均0%）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤防除は予防散布を重点に、6月上旬頃から定期的に行う。
- ② ほ場の排水を良くし、マルチ、敷わらを行う。

5. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の露地栽培スイカにおける5月5半旬現在の発生ほ場率は0%（過去6年の平均0%）であった。
- ② 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける5月5半旬現在の発生ほ場率は0%（過去5年の平均0%）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 梅雨期の降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布は株元中心に行う。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 紀中地域のトンネル栽培スイカにおけるワタアブラムシの発生ほ場率は5月4半旬現在92%（平成54%）、1葉あたり寄生虫数0.4頭（平成0.2頭）と平年に比べやや多い。

② 黄色水盤（紀の川市）の5月1～4半旬の飛来数は、184頭（平成81頭）と平年に比べやや多い。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 紀中地域のトンネル栽培スイカにおける1葉あたり寄生雌成虫数は5月4半旬現在カンザワハダニ0.5頭（平成0.3頭）、ナミハダニは0.3頭（平成0.3頭）であり、前者は平年に比べてやや多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

3. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 紀中地域のトンネル栽培スイカでは5月4半旬現在、発生は認めていない（平成発生圃場率35%、1葉あたり寄生虫数0.1頭）。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生が多い場合は4～5日間隔で、2回以上連続散布を行う。

② ハウス栽培は収穫終了後に、蒸し込みを行なう。

Ⅲ. 果 樹

＜カンキツ＞

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① カンキツの開花盛期は、「興津早生」で5月13日、「清見」は5月17日といずれも平年より約3日遅かった。今後の生育は平年並と予想される。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 5月下旬に薬剤散布を実施していない園では早急（6月上旬）に防除を行う。

② マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、2回目の散布は6月下旬とするが、1回目散布からの累積降水量が250mm程度となった時点で散布する。

③ 枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① カンキツの開花盛期は、「興津早生」で5月13日、「清見」は5月17日といずれも平年より約3日遅かった。今後の生育は平年並と予想される。
- ② 県予察ほ場（無防除）における春葉の越冬病斑量（発病葉率）は10.3%（平年19.9%）と平年より少なかったが、夏秋梢に越冬病斑がみられた。春葉における初発は5月27日時点ではみられていない（平年5月21日）。
- ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 銅水和剤の予防散布を行う。散布時には薬害発生に注意する。
 - ② 罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）における5月中下旬の発生は、雌成虫がわずかにみられた。なお、マシン油乳剤散布を行っていない一部の現地ほ場において、雌成虫の発生がみられた。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。マシン油乳剤の散布は発生初期に行なうと高い防除効果が得られる。

4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生時期

第1世代1令幼虫最盛期	6月1半旬	（平年6月1半旬）
同 2令幼虫最盛期	6月4～5半旬	（平年6月4～5半旬）
同 雌成虫初発日	6月5半旬	（平年6月5半旬）

 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 果樹試験場内の県予察ほ場（無防除）での第1世代1令幼虫の初発は5月18日（初発日の平年：5月16.9日）にみられ、平年並であった。
 - ② 昨年10月の紀北（海南市下津）、紀中、紀南（田辺市以北）における巡回調査では、発生果率は0.1%（平年0.4%）、発生園率は3%（平年7%）と平年より少なかった。
- (3) 防除上考すべき諸点
 - ① 多発園では、2令幼虫最盛期（県予察ほ場では6月4～5半旬）にマシン油乳剤や有機リン系の殺虫剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察ほ場（無防除）における初発時期および発生量は平年並であった。
 - ② 日高郡由良町の現地ほ場に設置した黄色粘着トラップにおける初発時期は平年並および誘殺数は平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 地域での発生消長調査の結果により、適期防除に努める。

6. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）、各地域とも発生時期、発生量ともに平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 各園地の発生の状況を把握し、適期防除に努める。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域における昨年10月の「富有」の発病葉率は27.4%（平成35.9%）と平成よりやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 伝染源となる病斑上の分生子は、6月に入ると活発に形成され、伝染を繰り返す。分生子は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏を丁寧に散布する。

2. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報根拠

- ① 紀北地域における昨年10月の「富有」の円星落葉病の発病葉率は、8.8%（平成3.6%）と平成よりやや多かった。角斑落葉病の発病葉率は、17.9%（平成22.7%）と平成よりやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 円星落葉病の子のう胞子の飛散は、5月下旬～7月中旬の降雨後に多くみられるので、この時期に薬剤を定期的に予防散布する。
② 防除は有機銅水和剤、マンゼブ又はマンネブ水和剤とする。

3. カキクダアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 黄色粘着板による4月の誘殺数は12頭（平成6.7頭）とやや多かった。
② 紀北地域における越冬虫による5月中旬の被害葉率は「富有」で0%（平成0.2%）、「刀根早生」・「平核無」で0%（平成0.1%）と平成並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防除適期は新成虫飛来期の6月上中旬である。

4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域における5月中旬の「富有」の寄生花蕾率は2.6%（平成1.5%）と平成よりやや多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本種の防除には孵化幼虫の成育ステージがそろそろ6月上中旬の防除が重要である。多発園では散布量を多くして、丁寧に散布する。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域における5月中旬の発生園率は80%（平成44%）、発病葉率は7.7%（平成1.4%）と平成より多かった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 降雨前の予防散布に努める。

- ② 防風ネット、防風樹などの耕種的防除を励行する。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での本年の越冬量は、0.04頭（平年0.23頭（極端に越冬量が多かった年を除く））と、平年よりやや少なかった。スギ・ヒノキの球果は昨年と比べ多いと予想されるので、夏以降の果樹園への飛来は少ないと考えられる。
- ② 県南部での越冬成虫の捕獲地点数、捕獲頭数は平年に比べ少なかった（本年2か所、2頭、極端に越冬量が多かった平成8年を除く過去20か年の平均4.1か所、7.4頭）。
- ③ スギ・ヒノキの球果は前年に比べ多いと予想されるので、夏以降の果樹園への飛来は少ないと考えられる。
- ④ 県南部における5月3～4半旬のチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシの誘殺数が増加している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② ウメの被害には品種間差が大きく、小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。カンキツでは蕾、花を加害するので、被害状況を観察して防除する。
- ③ カメムシ類の最新の発生状況は、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内の農作物病虫害防除所コーナー果樹カメムシ情報を参照する。
- ④ 農薬については最新の登録情報（農林水産消費安全技術センター 農薬登録情報提供システム：<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>）を参照し、適正に使用する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2301)までお願いします。